

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 May Cho Min

論 文 題 目

Emotional Competence, Relational Quality, and Interpersonal Conflict Management Styles of University Students: Cross-Cultural Comparison in Asia

論文審査担当者

主 査
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井次郎
名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授 松本真理子
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 石井秀宗

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本研究は、アジアの大学生における情動的コンピテンス、関係性満足度および対人葛藤スタイルの関係を比較文化的に検討している。比較文化研究の多くは、東西の比較が中心で、特に欧米対日中韓の比較が多い。本論文は「アジア」をこの3カ国で代表しようとしていることが問題であることを主張し、また個人主義・集団主義の比較では、アジアを一様に集団主義と扱っていることが間違いであると指摘している。

本研究の目的は、アジア地域の文化は多様であることを、情動的コンピテンスを取り上げて、その文化差を検討することにある。研究1はアジアの各地域の代表として、ミャンマー、日本、中国、バングラデッシュの4カ国の学生を比較し、情動的コンピテンスのレベルを比較検討した。その結果、ミャンマーの情動コンピテンスが最も高く、日本が一番低いことが明らかにされた。また、性差と文化には交互作用があり、ミャンマーと中国は女性のほうが高い一方で、日本とバングラデッシュでは男性のほうが高いことが明らかにされた。

研究2では、情動的コンピテンスと関係満足度の関係の強さをミャンマーと日本で比較した。親友、恋人、兄弟、父親、母親との関係性について、両変数の関わり方が異なることを明らかにした。その結果、ミャンマーの学生がいずれの関係性においても満足度が高く、両文化とも情動的コンピテンスが関係満足度に寄与することが確認された。

研究3は、対人葛藤方略と情動的コンピテンスの関連を日本とミャンマーの学生間で比較した。関係性の種類によって、好まれる方略が異なることを両文化で確認されたが、特にミャンマーのほうが統合方略および同化方略を好む一方で、日本は妥協をより選考していた。

考察では、情動的コンピテンスとそれが対人関係にもたらす影響がアジアの文化間において多種多様であることを結論付け、その意義について議論している。同じ集団主義と思われている文化同士でも、大きな差異があり、その多様性についてもっと検討が望まれることを提起している。

以上、本研究は従来の個人主義・集団主義の枠組みによる文化比較から脱却し、同じアジア地域内の国々の比較を、情動的コンピテンスと対人関係の関連に着目しながら多角的に検討している。特に、本論文の独自性と学問的貢献として特筆すべき点は次の通りである。

第1に、アジア人を一括りに取り扱う西洋研究者に対して、ステレオタイプ化の警鐘を鳴らしていることが評価できる。同じ集団主義文化とされていても、本研究のように、情動的表出・解読においては文化差があることが認められ、比較文化研究は大雑把な類型化がもたらす誤解を指摘している。

第2に、情動的コンピテンスを個人の特性として理解せずに、関係性によってそ

論文審査の結果の要旨

の性質が異なることを前提としていることがこのテーマでの研究としては目新しい。本研究では親密性を次元に関係性の比較を行なっており、人の対人行動や情動経験が万人に対して発揮されるのではなく、特定相手には、特定の行動や情動が経験されることを示唆している。

第3に、経済的に豊かな日本よりも、比較的貧困なミャンマーの対象者のほうが、人間関係の満足度を有意に高く感じていたことを明らかにし、ウェルビーイングの観点から重要な示唆を与えている。このことには、他の観点から研究をアプローチする意義を指南しており、後続の研究のポテンシャルを示している。

第4に、対人葛藤の研究パラダイムに新たな視点を提供し、感情のコントロールと他者の感情の解釈が、葛藤方略に影響していることを明らかにしたことが注目値する。葛藤方略は個人の特性的な概念ではなく、情動コンピテンスによって方略の選好が異なることを裏付けていることが、この領域での研究に対して大きな貢献といえよう。

一方、本論文に対して審査委員からは主に以下の疑問が呈された。

- 1) 大学生をサンプルとしているが、発展途上国と先進国の間では、学生の社会層が異なるのではないか。特に、ミャンマーやバングラデッシュでは大学生はエリート富裕層である一方で、日本ではより一般的な社会層の代表ではないか。
- 2) 因果関係モデルを検討しているが、媒介モデルだけを検証している。調整モデルなどの可能性は探っていないのはなぜか。
- 3) 因果モデルの係数が低いが、実質的な意味があるのか。単なる大きなサンプルによる有意性を表しているのではないか。
- 4) 情動コンピテンスと、ウェルビーイングの直接的な変数との関係の検討が望まれる。
- 5) 日本人の情動コンピテンスが一貫して低い、実際そうではないように思われる。なぜ他国と比べると低いのか。反応バイアスの可能性はないか。
- 6) 宗教との関係はより強いと思われるが、日本の対象者は圧倒的に「無宗教」と答えている。他の聞き方を使えば、より正確に信仰を調べることができたのでは。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

これらの指摘に対して、博士学位請求者はよく認識しており、質疑に対する応答も具体的かつ適切なものであった。以上を総合して、本論文は新たな視点と知見を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。